
過去の記憶は今のトラウマ

紫苑 鎌融

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去の記憶は今のトラウマ

【Nコード】

N9876Y

【作者名】

紫苑 鎌鼬

【あらすじ】

とある国でとある学園に通う大貴族の娘リユネは婚約者である王子リクトに日々苦しめられ傷つけられていた。廊下で鉢合わせでもすればすぐに追いかけれられ首を絞められ、口付けられる。従わない私が憎いらしい。そう勘違いし怯える彼女と本当は彼女のことが愛してやまない独占欲大で俺様な彼とのすれ違いな恋愛物語

今の関係

「はあっ、はあっ、…はあっ」
早く…早く逃げなきゃ…！

ダダッ！！

鎖骨辺りまである長く緩やかな赤い髪がフワツと浮いて流れていく。

私はとても広い校舎の中を全力で走っていた。

右手で授業で使う資料の束と筆箱を抱え、
本来一本道でたどり着くはずの教室までの道のりを、
私は今、ある人から逃げるためだけに遠回りをしていた。

「待て…！」

彼の声がすぐそばまで迫ってきていた。

ポロ…ッ

「……あ！？」

思った以上に近くで声が出たため、
私は筆箱を落としてしまった。
カタンッとそれは音をたて壁際に落ちた。

ヤバ…！

私は急いで落としてしまった筆箱を左手で拾ったが…

ドンッ！！

「うっ…」

と壁に叩きつけられた。

その瞬間背中に大きな衝撃を感じて思わずうめく。

それは捕まったことを悟った瞬間でもあった。

背中に感じたとき反射的に上を見上げると…、

視界の隅で彼の腕が私の方へと延びていくのが見えて恐怖した。

だが身構える時間などなくて…

ガッ”！！

と首を絞められた。

力が抜けて両手からものが落ちる。

ヒラリと資料の束が舞い散らばって落ちた。

私の体を他から見えぬように彼の影で覆われていた。視界が暗い。

「くうウ…ッ」

「もう逃がさない」

思わず首を絞めてくる腕をつかむ。

そして彼をにらんだ。

く…苦しい…なんでいつもこんなこと…

そんな思いで見つめてた。

しかし彼は不適な笑みを浮かべながら私を見下ろしてた。

「逃げるな。俺に従え。」

いつもお前は従わない…苛立つんだよ、リュネ。」

私の心中を察したのか彼はそう呟いた。リュネというのは私の名前だ。
名前を呼ぶときはいつも不機嫌だ。
彼の青い瞳が苛立ちをさらに募らせて首を絞める力をぎゅっと強くする。

「ッ…ウウ」

息が…できない、苦しい。

助けて…はなして…。

「…また、はめてないじゃないか、はめろっていっただろ、リュネ」

ふと彼は首から手を離し、その腕を背に回して反対の手で私の左手を手を取った。

彼は器用に口元まで手を引き寄せて口付けた。

「…ッ!？」

私は望んでいないが婚約を結んでいる。

彼は、いつもそうやって私が婚約指輪をしないことをとがめるように口付けてくるが、

慣れるわけもなく悪寒が走る。

息ができるようになった状況なのに
できなかつた。

彼の行動する理由が分からないのだ。
そして…怖い。

「今、持っているか？」

「…も、もって…、ない」

「な、んで…ーンッ!？」

ただ、わからないままに聞いた言葉は顔を近づけてきた彼の中に飲み込まれた。

「んう……んんッ」

口付けられ、逃れようとすればするほど彼は私を拘束する。

ひどく苦しくて怖くて何がなんだかわからない。

そういうとき彼は私に息を吹き込んでくる。何度もキスを繰り返す彼に、ただされるがままの私は呼吸がままならないからだろう。

本当に不思議で怖い存在なのだ、彼は。私を残酷なほど苦しませるときもあれば、こういう風に触れてくる。

「んう…や、やめ……」

彼が一息ついて再び口付けようとしてきたとき…

キーンコーンカーンコーン

休み時間が終わる5分前の鐘が鳴った。

「…チッ」

彼は悔しそうに舌打ちし、私から離れた。

そして私の床に散らばった資料を束ねて筆箱も拾うと、解放された

ばかりの呆然としている私に差し出してきた。

「…ほら」

彼は私に受けとるように促す。

「……………」

ふと我にかえった私はだまって受け取った。
ちよつとは優しいんだなと思いつながら

「…拾ってやったんだぞ、感謝はないのか？」

青色の瞳が怪しげに見つめてくる。

「あ、有難うございます……………殿下」

一体誰のせいだと思つて…！

そう心の中で私は毒付きながらもお礼をのべる。

「礼なんかより、俺の名前…呼べ。」

「え…？」

何で名前なんか……………。

そう思つて見上げてみると、

金髪をかきあげて

我慢しきれなかったのか不機嫌顔で、

「リュネは名前で呼べっていったら…！ほら、拾ってやったんだからはやく呼べ」

そう、つつかかってきた。

なんて俺様なやつだろう。

優しいだなんて思ったのは間違いだったんだ。

「…リクト殿下」

私は渋々名前を呟いた。

そう彼の名前はリクト。

この国の第二王位継承権を持ち、
貴族のなかでもほぼ王家と対等な位を持つ大貴族の長女の私と婚約
をしている人だ。

「そんな嫌そうに呼ばれたくはないんだが…まあいい許してやる。」

彼は私が呼んであげたにも関わらず

不満顔であった。納得がいつてないらしい。

「リユネ、次は必ず指輪してこいよ。これは命令だからな！」

そう彼は私に言いつけ去っていった。

その後ろ姿を見ながら

「…あんな邪魔になるものつけるわけないじゃん」

と、小さく呟いた。

ごそごそとポケットのなかを探つて1つの大きなルビーの指輪を取
り出す。

キラツと輝きを放つ大きなそれは、
それなりの重さがあった。

そんなものつけたら、手作業には邪魔だし、王子を狙う女子たちの

標的になってしまふ。私はそれが嫌だった。

「私を苦しめて傷つけて遊ぶのが楽しいんだ、彼は。」

そうとしか私には考えられなかったのであった。

血縁者と考え事

そのあと、私は急いで教室に戻った。席についてすぐに次の準備をして待つ。

「ふうー……」

ま、間に合った〜

と心の中で心底安堵し、一息つく。

いつも彼と関わりと授業に支障が出るのだ。

というかはつきり言って余裕がない！

そういつもギリギリな私を見てか、

「また、ギリギリじゃん、さっきまでは余裕ありりだったのに、なんかあったのか?？」

と、隣に座っている偶然にも私の血縁者である男レオが、怪しげに聞いてくる。

おそらく……また、というのは今回も

もしくは今日も、のどちらかの意味を含ませているのだろう。

……どちらにせよ、怪しまれているのは確か。

なかなか鋭い……！厄介だ……！

と舌打ち気分で、正直に殿下との一件を明かしたくもなるが、それは言うわけにいかなかった。

そういう事情が私と殿下にはある。

「そうなんだよねー……実はあったんだよ、それが」

…この際、でつち上げちゃえ
そう思い至った。

この手のやつは否定すると疑い深くなる。
少し面倒そうにため息をついてレオをうかがった。

「何が？」

やはり興味を持ったようで食いついてきた。

レオは赤髪にしてルビーのように輝く瞳をもっている。その瞳は今、
好奇心と探求心でいっぱいだった。

「それがね…」

少しもつたいつけながら言葉を繋げ…

さも嫌そうに、

「先輩とさ、廊下先でぶつかっちゃって、お互い持ってた資料が床
でごちゃ混ぜ。それをなんとか識別して分けるのに手間取ったんだ。
ほんと参ったよ。」

と両手でお手上げポーズ。

…どう？私の現実にあるそうでない話は。と自分では傑作のつもり。

「ふーん。」

結局誰とぶつかったんだ？」

レオは私の話に生返事で、一番聞かれたくなかったことを聞いてく
る。

「…さあ？知らない人だったよ。お互い急いでたから
知りたくもない相手だったよ…」。

と心で呟き、首をかしげた。

「ふーん。知らない人ね！。

…怪我は？お前ドジだからなくしたんじゃないのか？？」

彼は私をわざとらしくじろじろと見て言った。

「…！？しないよ！

ぶつかったただけでするわけないじゃん…！」

思わずその言葉に赤面した。

確かに私はドジだし、衝撃があつた背中では痛いけど、そんな弱々しくない！

「ふーん？そうか？怪しいな。

…それはそれとして油断すんなよ？」

「油断なんていつもしてないよ！」

怒つたように私は語尾を強めて言った。

あーもうっ！憎らしい、何この態度！

レオのせいで気分を駄目にした。

落ち着かせるために深呼吸して

授業に集中する。

「あ、そう。せいぜい気を付けるんだな」

「わかってるよ、全くもう！いつもそうやって……………ッ」

私は授業に頭を切り替えたため、

彼の目が細まったことに気づかなかった。

しかし、授業といっても簡単なものだ。考え事していても出来てしまふ。

そう、考え事といえは、

—————殿下のことだ。

何故、私なんかと婚約を結んだのだろうか？

私と彼が初めて出会ったのは公式の場ではない。どこぞの貴族が開いた仮面舞踏会である。当然素顔が見えなければ正体などわかるはずもない。

彼とあつて彼の指示を背いたら…

あそはとんとん拍子でこうなってしまうたのだから。

しかも私を痛めつけて…

——ホント何がしたいんだか。

考えれば考えるだけ無駄になっているようにしか思えないほど、殿下の行動は矛盾していたのだった

血縁者と考え事（後書き）

血縁者レオ!!!

新キヤラ登場 さて話がここから展開していきますよー!

待ち伏せ者とストーカー（前書き）

リクト殿下とレオ視点です

待ち伏せ者とストーカー

俺はリクト。

第二王位継承権をもち、

リユネとの婚約を取り付けた王子だ。

王子という立場のせいか、

近寄ってくる女は欲に目が眩んだ者ばかり。そういうやつらにはうんざりしていた。褒美を求めにくせにそれ相応のことをしない。それが癪に障って軽蔑したりするのは簡単だった。

人を見下せたり、支配できることに快感を覚えた。

そんな快感ばかりにとらわれていたときだ、俺に従わない女が現れたのは。

最初は従わせようとムキになっていた。俺の指示は聞かず兄の指示は素直に聞くそんなやつだったから余計にだ。婚約のきっかけも服従させたいの一心だったのも…認めよう。だが、兄にとられたくなかった…

云わば独占したかったの一言が今の冥利に尽きる。

せつかく婚約者として自分のものにしたのだが、婚約指輪すらはめてくれない。

しかも名前すら呼んではくれない。

あげくの果てに学園で会おうものならなにをおいても一目散で逃げてしまふ。

俺に逆らえばどうなるかなんて身に染み付いているはずなのに。

そんな彼女が唯一俺を見つめてくれるのは俺が彼女を捕まえて苦しめているときだけ。

あの俺に対抗しようとする目が俺にとつての救いだつた
俺に気持ちをぶつけてくれるありのままの視線。
それが欲しくて楽しくていじめるのが楽しかった。
何があつても俺に頼ろうとしない彼女を俺に依存させたいと思う。
まだ時間はある。
少しでも優しくすれば心を揺るがせる彼女がいるかぎり俺に勝機は
あるのだから。

次の日、とある情報を得て資料室で彼女を待ち伏せていたら、その
広い資料室でまんまと出会って昨日と同じように捕まえ、人気のな
い隅までつれこんだ。そして苦しめで救い出すように口付けた。
拒絶する彼女の反応が愛しくて俺は幸福で満ち足りていた。

しかし、俺の余裕や幸せはすぐに消えてしまった。
とある目撃者のせいだ。

俺はレオ。炎の属性を司る者だ。

そして、隣の席で考え事に没頭しているリュネの血縁者である。

俺は小さい頃からリュネと交流があつた。なににおいても俺にとつ
て近い存在だつた。

しかし、今、リュネは俺に隠し事をしている。

特に同じクラスになって話すようになって薄々気づいてしまった。

――彼女の行動パターンに狂いがあることを。

今までは問い詰めることが彼女の負担になると思って我慢していた。
だが隣の席になってより存在感が増した中、我慢の限界が早くもや

つて来た。

「リーなにかあったのか？」

と、怪しげに聞いてしまうのは案外簡単だった。

「あつたんだよね、それが」

と意外にも答えてくれるのを聞いて俺は、我慢は無駄だったのかと思えた。

しかし思いのほか情報は得られた。

今日あったことを彼女が面倒くさそうに話してくれて、多少現実味もあつたが違和感のあるものだった。

誰とぶつかったのかを問われれば、

知らない人だったとはぐらかすように言われ、

怪我はないかと問えば、

ないに決まってる、と断言される。

油断するなと警告すれば

してない！ときっぱり返された。

まるで、今振り返ると誰かに迫られてる前提の会話のような気がした。

出来事の話に違和感があつたのも

俺が聞いたこととずれていたからだと今は断定できる。

俺は今までのことを聞いたのに

リュネは今日のことを話していた…しかも俺の聞きたいことは曖昧な表現で返してきて。

まるで…

話したいのに話せないから、

わざとヒントを混ぜて、
助けを求めているのではないのか
と錯覚してしまうほどに。

そして次の日あとをつけていたら、
錯覚だと思っていたことが本当のことだったかもと衝撃を受けたの
だった。

待ち伏せ者とストーカー（後書き）

はやくも激突か！？
次回衝突します！！

衝突と甘い囁き

指輪の指示を受けた次の日、
私はめつたに学園にこない学友のリオンと一緒に、昼休みに資料室
に行こうと言う話を教室でしていた。

「リオン、久しぶりだね
体調は大丈夫？」

私は優しく話しかける。
桃色の髪を持つリオンは体が弱く、魔力が乏しい。

本来、人はさほど生きることには魔力は必要ではないのだが、
日々、魔力の補給が必要ぐらい彼女の体は魔力に依存していた。

「だいぶ補給したから大丈夫。
しばらくは通えそうだから心配しないで」

ふんわりと彼女は笑った。
私も安堵してそれなら…と資料室の話を持ちかける。

「ねえ、
だったら資料室に行かない？
まだ、宿題が終わってなくてさ」

「うん、いいよ。私もたまっている課題やらなきやいけないし」
という会話で行くことが決まった。
お互いに足りないところが同じだから笑って話せたのだ。

…よかった、これでもう追いかけれない。

私にとってリオンがそばにいてくれることは殿下との接触を阻むことにも繋がるのだ。

殿下は周囲に人がいると手を出してこない。噂などを気にしてくれるのだ。

この婚約はまだ知られてはいけないから。

「まだ終わってないのか？リュネ」

唐突に会話にレオが割り込んできた。

さも上から視線で人を馬鹿にしてくる。

「な…!？」

し、仕方ないじゃん！

だって昨日は…。」

慌てて理由を言おうと思ったけどそれは躊躇われた。

「昨日は…?？」

いぶかしげに聞いてくるレオ。

「いや、なんでもない。

やるの忘れてただけ」

私は心を沈めてそう答えた。

実際はそうではなかったが、

やるような気力が、体力が残ってなかったのだ。

何故なら

昨晚は叩きつけられた背中と締め付けられた喉が痛みだして耐えられなかったから。

「…ふん。

ま、昼休みに頑張れば？」

いつもしつこいレオも追求はしないままそつにやりと口角を上げて言った。

「…言われなくてもやるよ！」

つとめと明るく言うことで一瞬怪しかった雰囲気をもとに戻し、会話は終わった。

「昨日何かあったの？」

「まあ、ちよつとね…」

小さく不安げに問うリオンに私は言葉を濁して頷いた。

そして昼休み。

二人で資料室に向かい、それぞれに資料を探していく。

ズラリとならぶ本や資料の棚は古いものから新しいものまで幅広く並べられていてとても広かった。

人気がない資料室の隅で探していると

自分の身の丈では届かないところに、

「あ…！」

お目当てのものが見つかった。

精一杯背伸びをしても届かない。

「ツーン……ウーン」

背中に鈍い痛みが走る。

まだ完治していないのだ。

そうやってもたもたしているうちに
誰かの影が私をおおって…

スッ…

と、

とろろとしたものをとってしまった。

そしてそれをそのまま私に差し出してくれた。

これで宿題ができる…。

そんな安堵と共に

「あ、ありがとうございます…ッ!?!?」

そうお礼をいって受け取ったとき、

グイッと体を隅に引っ張られた。

バンッ

と再びあのときのように打ち付けられる。

「ツーン……ウーン」

今の衝撃で目の前が一瞬暗くなり

前方へ倒れそうになったところを支えられ、口付けられた。

「…んんう!?!?」

この動作でいったい誰の仕業かわかってしまった。
あの彼だ…！

勢いよく吸い付かれ頭もくらくらしってくるがそんなことはどうでも
いい、それよりも…

「や、やめ……ッ」
「やめない……」

必死に彼の胸元を押し抵抗し睨むが彼は私に甘く囁いてやめよう
とししない。

「んッ…リ、リオンが…」

私は友達と宿題しに来たのだ。

彼とこんなことをするためじゃない。

そう訴えようとすると

彼は口づけを一旦やめて、

「ああ、あいつか。」

リユネといた女なら俺と同じように口説いてるから問題ない」

とあっさりそういって私を抱き寄せると後頭部を押さえつけてキス
してきた。

「な……ッ!？」

な、なんだって!？

あのリオンが?!

そう叫びたかった私の言葉は彼の口の中に消えていった。

「んっ…んう、…んんー！」

時折口の中に割り込んで入ってくる彼の舌は私のそれを絡めて弄ぶ。

ちよ、ちよつとまっつてよ、

さつき口説かれるっつていった!?

この状況のどこが口説いてる

っつていうのよ!!!

「んっ、んっ…、んんー!!！」

舌に翻弄されながらも抵抗を諦めない私にちよつと苛ついたのか彼は一旦深くキスをして中断した。

「なんだ、

またしてないのか、婚約指輪。

しろっつていっただろ？」

と自分のを見せてくる彼。

彼のは至ってシンプルなリングだ。

なのに私のは…あのおもたい大きな指輪。不公平すぎる。

「あんなのつけられっこな」

つけられっこないでしょ!!!

再びキスされて何も言えなくなってしまうが、再び離れると

「ッ…!!っ、つけられないってあんなの!!!でかいし、重いし、似合わないし

第一………」

「リユネ…?」

彼ではない声が彼の後ろの方から聞こえてきた。この声は…

「レ、レオ!?なんで、ここ!?!」

私は、はっとなって緩んだリクトの腕から逃げ出した。だが、がっとなんかを後方からぎゅっと抱きすくめられ動けない。

レオもまた私とリクトを見て硬直していた。そしてリクトを睨んでいる。

「お前は誰だ?」

リクトの威嚇するような声が耳元で発せられた。

「俺はレオ。」

そいつを離せ」

「何故…?」

そうリクトは問いかけながらも私を離してくれない。むしろ強くなつた。

「イタッ……………」

思わずうめいた。

体が密着して肌でリクトの感情が分かって怖くなった。リクトが怒ってる。

それもどうしようもなく。

「リュネが痛がっている。
それに…」

リュネはあなたのものじゃない」

レオはきつぱりと言った。

レオもまた怒っていた。

「いやだね、こいつは俺のものだ」

リクトはそういつて私の首筋に口付けた…そして強く吸い付く。
まるで所有物に自分の印をつけておくように。

「ッ”…！」

わたしは顔を歪めて耐えた。

甘いしびれにのせられないように。

「ッ！！」

リュネを…リュネを離せ。

そいつは殿下の勝手な都合で振り回せるほど体のいい玩具じゃない」

そういうと、一歩レオが近づいた。

「レオ…！」

たまにはいいこというじゃん。

そうだよ、私は玩具じゃない。

でも…。

「お前に俺のやることを咎められる筋合いはない」

彼は言い切った。
それが当然かのように。

「そうだな。…筋合いはない。
だが、だからといって
見過ごすことなんてできるほど心は広
くないんだよ、殿下」

レオは瞬時に私の肩を抱く殿下の腕をつかんだ。
そして…そこから炎が
ポオオオウ””
と、吹いた。

「ひい…ッ」
目の前に燃え盛った一瞬の炎。
怖かった。距離感0の殺気の炎は。

「つう””水よ!!!」
リクトがそう叫ぶと
一瞬にして炎はかき消えた。
それと同時にレオが飛び退いた。

「うう””」
リクトがうめいて膝をつく。
それと一緒に私も床に崩れ落ちた。
そして一番先に見えたのは

攻撃されてもなお
私を抱く火傷を負った腕

「リ、…リクト…！」

私は青ざめた。

いくらなんでもこれは……。

そう私に思わせるほど、彼の腕は重症だった。

やりすぎだ…。

柄にもなくそう思った。

「…ッ」

彼は痛みで顔を歪め、動けない。

私はとつさに癒しの呪文を唱えようとした。しかし…

「リユネ、俺がやる。やりすぎた。

お前は離れる、そいつから」

レオが怒りと後悔の念を抱いて呟いたのがわかった。

私を殿下から離して

片手で彼の腕を直す。

「…。」

リクトはレオを睨んでいた。

だが、

私を取り返そうとはしなかった。

キンコンカンコーン

キンコンカンコーン

遠くのように近くに聞こえた鐘の音が響いた。

「殿下、俺も我慢できない。
次、苦しめてたら…
殿下とて容赦はしない」

「苦しめはしない。
婚約者だからな」

レオの言葉に

フツとリクトは不敵な笑みを浮かべて甘くささやいた。

「…ッ!!」

レオは苦しそうに息を詰めた。

「殿下…?」

今までの殿下とはまた違った雰囲気をかもしだしていたので
私は首をかしげた。

「いくぞ、リュネ」

「うん、まってレオ」

レオに引かれてその場を去るときに、

「リュネ、次は俺のものだからな」

「え…?」

そう囁かれた。

甘く勝利に満ちた声で。

その言葉がずっと私の頭の中で繰り返されていた。

衝突と甘い囁き（後書き）

レオがリユネを勝ち取ったぞ！！
だが…

最期にレオ…なんだか負けてない？？

「負けたかも、

俺ただの従兄だし」

「ふんっ俺様に怪我を追わせても逆効果だったな^^」

「……………」

わすれびと

私はレオと資料室を出ようと自分の荷物を持った。

そのまま出ようと思ったが重大な忘れ物をおもいだした！

リオンだ…！

宿題の資料を探するとき別々になったままだったのをすっかり動揺してて忘れていたのだ。

あのあと…どうなったのだろうか？

私は考え込んでしまった。

テーブルには彼女の荷物がそのままだ。殿下が口説かれてるって言ってたから…誰かに私と同じようにリオンにしたのだろうか。

「リユネ？戻るぞ、はやくしないと…」

レオが怪訝そうに私を帰らせようと促す。早くしないと次の授業に遅刻するのはわかってるんだけど…

「レオ…ッ、でも、リオンが…」

私は混乱したまま留まるよう呟いた。

まだ、頭の中がごちゃごちゃで
どうすればいいかわからない。
まとも話すことさえ億劫だった。

「リオン…？リオンならー」

「リオンちゃんならここにいるぜ。
ま、気絶しちまつてるけどな」

レオの声を遮って新たな声が聞こえた。殿下よりもハスキーでやん
ちゃそうな声だった。

「え…！？」

「驚かせるなよ」

ルーテ。…ッ！？」

私が驚いて振り向くと同時に
レオが半分あきれたような声を出したが最後は息を飲んだ音がした。
私も声を発したルーテの姿を見て驚く。だってそこには……

「わりい、わりい。仕方ないだろ、

リオンちゃんを勝手にかつさらっていくわけにゃあ、いかないしな
あ？」

ルーテが後ろを向いて私たちと違う人に相槌を促した。

「まあな。だが、お前はうまくいったんだな。俺も邪魔さえされな
きゃ、さらっていきたくったが。」

妙な反省気質な声で答える殿下が現れた。そしてルーテの隣で資料を片手で抱えている。

「なっ…!?!」

なんでそうなる…!?!

それにリオン…!!

殿下の問題発言につっこみたくなったがリオンの状況に言葉が出なかった。

ルーテという明るい茶髪のクラスメートの男がリオンを軽々と抱き上げているのだ。

そして台詞通りにリオンは意識がないようで力なく彼に身体を預けていた。

もし、レオが助けられなかったら同じようにされてたかもしれない…
い…
と思うとぞっとした。

何されるかわからないのだ、怖くてたまらない。

「ルーテ、リオンをど、どうするつもりなの!?!」

そう問わずにはいられなかった。
だがその反面、
答えに怯える自分がいる。

「ん…?さあ、どうすっかな」
「……………!?!」

彼はにやりと笑みを浮かべ

意味ありげにためらいを見せた。

しかし…やるときは本気でやりそうな目をしていた。
止めようとしたって私ではかなわない
どうすればいい？…どうすれば…ッ

「ルーテ、

からかうのもいい加減にしろ。
保健室に運べばいいだけの話
だろ？」

レオが怒り気味にしずかな声をだす。

その言葉にルーテは苦笑したような笑みを浮かべた。

「そうそう^

もとからそのつもりだったぜ。

…というわけだから安心しな？

リュネちゃん」

と、何度も頷きながら私を見やった。

「君の大事な親友をわるいようにはしないから」

彼は私を見て

真剣に約束してくれた。

「な、ならいいけど。」

内心、ホントによかった…と

心底安堵していることを意地でも隠し通しながら。

「じゃあ、時間なくなるから
またねリュネちゃん、
あとついでにレオも」

「……リュネ、
次は指輪はめてこいよ？」

彼らはそう言いながら去っていった。

「……俺はおまけかよ」

レオは呟きながら深くため息をついた。

「……あ、リオンの資料……」。

彼らは苦手だ……去ってくれて一安心っていう感覚があったが、肝心の資料がおきっぱなしであったのだった。

わすれびと（後書き）

新キャラ登場！！

リユネもリオンも二人揃って
モテますね〜。

「私は嫌だ、こんなの！！」

と主人公はお怒り気味ですがね

レオとリュネ

あのことがあって私は今まで以上に平穏でいられなかった。
何故なら…

放課後レオに呼び出され、質問攻めがあったからだ。しかも雰囲気
が異常なほど怖くていつもみたいな冗談が混じったものなんてな
ったからだ。

一つ一つが真剣で重くのしかかってくる。

「は、話って何？」

人気がない屋上に呼び出され、そう緊張しながら聞いた。
問い詰められる内容なんてとっくに確信がついていたのに。

「資料室での一件に決まってるだろ。」

リュネ、

あの王子とどついう関係なんだ」

屋上の手すりに寄り掛かりながら

私にそう静かな怒りを見せて聞いてきた。

レオの目は私から外さない。まっすぐにとらえて真剣に見つめてく
る。

それがとても心苦しかった。

レオはもう私に問いかけるものの答えを知っているのになぜ聞く
だろ？

…リクトがばらしちゃって聞く必要なんてないのに。

そう沈んだ気持ちで彼から目をそらし

「…ひ、非公式だけど婚約関係なの。

私は望んでないけど…」

呟くように言った。

もう見られてしまった以上、話すしかない…

気持ちはどうしても下を向いていた。

「どうしてそれを隠してた？

王族との婚約だろ、それをなぜ…」

彼は少し辛そうに聞いてきた。

俺には教えてほしかった…そんな言葉聞こえてきそうなくらいに。

きっと心の中でそう思ってるに違いない。

私がレオの立場だったらきつとー…。

「…ごめん、レオ。ホントにごめん…。

この事は隠密だったの。本当なら隠し通していなければならなくて…

誰にも言えなかったの…」

私は思わず顔を歪めた。

苦しかった、悲しかった…心が破裂しそうだった。

今まで我慢してたせいで

心には重い義務や責任が大きいのしかかっていたのだ。

それが今、悲鳴をあげていた。

「…ッ」

レオはぐっと押し黙った。

カッン、カッン、カッン…。

一歩一歩私に近づいて正面で立ち止まると、私の背中に手を回して…

ぎゅっ

と抱き締めてきた。

「レ、…オ？」

ぎゅっと頭を胸元に押しやられ私は困惑した。戸惑うしかなかった。

だっていつになく優しく大切そうに抱き締めてくるのだから。その姿にもう怒りはなかった。

「…ごめん、俺は気づいてやれなかった、…なんにもできなかった」

顔を見せられまいときゅっと私を抱き寄せたまま、彼は私に眩くように謝った。

「レオ…？」

本当にいつもと彼の様子が違った。

普段はこんな素直で優しい人じゃない。

いつもはもっとこっぴどく…

からかってきたりとか、

冷やかしたりとか、冗談言ったりとか、軽く扱われたりとか、上から視線とか…

もっとツンツン？してたのに……

今はなんか…らしくない気がする。

「いつだ…」

「え…？」

「いつ、婚約が決まったんだ」

「お、王族のパーティのとき…」

半年くらい前の。」

私は慌てて言った。

多分そのときに婚約指輪を渡されたのだと思い出したから。

「そんなに前から…。」

じゃあ、

時々授業に遅れたりするのは…。」

どこか愕然とした聞き方だった。

「そ、それは、殿下につかまってたから…指輪をしろって催促されて…」

だんだん私は言葉に出したくなくなつた。答えたくない…口にするのに抵抗があつたのだ。

私はうつむいたままそれでも答えていた。

「何故指輪をしなかった？」

レオは私にそう聞きながら、私の左手を自分の手と絡めてくる。こ

つごつした大きな手が私をしつかり捕まえる。

「え、あ、そ、それは…」

私は望んでないし隠しておかなきゃいけなかったし、邪魔だから…」

自分の手が自分のものじゃない気がしてくるほど感覚がおかしくな
った。

よほど私は動揺しているみたい。
しどろもどろ答えてしまった。

「そうか。」

…じゃあ、あいつがなんのために婚約したのか聞いてもいいか？」

少し遠慮がちに出された問い。

私はビクッと震えてしまった。

気遣うように、労るように接してくれるレオが時折怖く感じる。

余談と本題とで分けて聞いてくる彼は一体どう思っているのだろうか？

「そ、れは…」

それを言ったら…私はどうなる？

家は…？自分が情けなくなる。口に出したらもう耐えられない…

私は黙りこんだ。

長年そばにいた彼にも言えないこと…隠し事があるなんて…苦しか
った。でも言えない。私は混乱していた。

頭の中がごちゃごちゃだ。

「俺には言えないことなのか」

「…ッ」

ビクッ

私は大きく震えた。

レオには言えないんじゃない…

誰にも言えないんだ。

その理由こそが

隠された理由なのだから。

いい加減で自分を惨めにするような…理由なんて。

声に出したくないんだ。

「…泣くな。リュネ」

レオは、ばつが悪そうに私から手を離して私の頬に手を当てて目尻をぬぐう。

いつの間にか

私は泣いていたようだった。

月日は過ぎて

あれから、月日が流れた。

とても忙しく、そしてなによりも違和感のある生活を送っていた。

レオはまったく話しかけてこなくなったし、このごろ学園を休んでいる。

そして王子とはまったく校舎内で会うことがない。

リオンも休校中で、リオンを口説いたらしいルーテも休んでいる。

それは実に平穩で少しさびしい部分もあるが心休まるひと時なことは間違いない。

だが、それ以上に、私は仕事に頭を悩ませていた。

私の仕事は家からの問題ごとの解決で頭を悩まし、ろくに睡眠もとれずに日は一刻とすぎていった。

両親が待つ屋敷には帰らず、別荘のひとつに身を置いている。そこへ帰るほうが近いからだ。一人のほうが仕事がしやすい。何も食わず、寝ずの状況が続いて、ついに最終日。

そのせいか、今日はとても頭が痛い。

終業式。

そして、帰りの会と授業。最終日はとても気分も体も最悪だった。それと同時にもう解放される安堵感がにじみ出る。

すべてが終わって帰るときだった。

もう私の帰るころにはほとんど誰もいない。

誰もいない廊下で、私は壁に手を当てて少し休んでいた。

「・・・っ」

思っていた以上に、ぐらぐらする。頭が割れるように痛い。視界も霧がかかったようにかすんでわからない。

「リュネ・・・？」

そんなとき、ふと、前方から聞き覚えのある甘い声がした。

「・・・っ!?!?」

リクト殿下だ。

逃げなきゃ。

いつのまにか反射的にそう思って、殿下と反対方向を走った。

「ーリュネツッ!?!」

だが、全力で走れない。息がすぐに切れ、足元がおぼつき、視界がはつきりしなくなる。声も遠くで叫んでるようにしか聞こえなかった。

「ッ！」

俺を、見てにげたりなんかするから……！！」

殿下は私に必死で叫ぶ。意識を保たせるためなのかもしれない。

でも……でも、と私は思う。

でも……自分を、殿下は自分自身を非難してるかのような響きを込めてた気がした。

今までの自分を責めてるような響きが……。

。そう思い至ると、より、彼に警戒心をとき始めたのかもしれない……。

意識が遠のいた。

「……っ」「」

もう……だめだ。

「リユネツ！？」

おいっしっかりしろっ！！リユネツ！！リユ……」

目を開けてても闇に包まれつつあった、視界をふさいで、目を閉じ、私は……意識を沈めた。

“愛”（前書き）

リクト殿下視点です！

“愛”

「リュネ！！リュネ・・・！！」

彼女を抱き支え、叫ぶが、

彼女は目を閉じたまま、反応しない。

「・・・ツ・・・ツ・・・ツ」

浅く、単発的に彼女は呼吸を繰り返すだけだ。

表情は辛く、苦しそうに顔をゆがませている。

俺が意図的に苦しませていた表情より遥かに苦しそうだ。

自分の手から感じられる彼女の体温は予想以上に熱い。

どうしようもなく焦った。

久しぶりに彼女に会ったというのに、

彼女は体調を崩してた。

そしてそれ以上に、

体調の悪い彼女が、反射的に俺から逃げようとしていたことに傷ついた。

苦しんだ顔で己をまっすぐに見つめる彼女が好きだったのに

今の、今さっきの彼女の、苦しそうな顔で見つめられるのはいやだった。

胸が締め付けられた。

見ていられないと思った。
無事な姿が見たいと思った。

はやくかのじよを医者に見せなければ!!

俺は、そう思うと同時に、ザツと彼女を抱き上げて立ち上がり
迎えに来る馬車に早足で向かった。

王子である自分専用の医者に見せれば、
彼女はよくなると、考えたからだ。

「急いで王城に向かってくれ!!」

いそいで、馬車に駆け込み、そう、運転手に叫んだ。
馬車がかたがたと音を立てて走り始めた。

自分の学蘭を彼女に着せ、冷やさないように彼女を抱きながら
今、自分に何が出来るか考えていた。

王城に着き、彼女をすぐさま己の部屋に連れて行った。

「すぐに医者をよんでくれ!!」

手短のものにそう命じて、ただ、彼女をベットに運び、
額に冷水で冷やしたタオルを置いてやることしか、
俺にはできなかった。

ただただ、気が焦って、
医者が来るまでの間がとて長く感じた。

このまま医者が来なくて、彼女が命を落とすらぶどうしようなんて思ったりもした。

自分を責めるしかなかった。

どうして、もっとはやく、彼女と会おうなんて思わなかったのか。会おうとすることだっていくらでもできたのに！

自分から何をいても逃げようと彼女に仕向けたのは自分だ。

あんなに無理させて・俺は何がしたかったんだ。

あんな顔見たくなかったのに！

「王子、何があったのですか！」

医者が到着して、俺は手短に事情を説明した。

「学園で会った時、彼女が倒れて・・・。

彼女は俺の婚約者だ。すぐに診察してくれ！！」

俺はそう説明することしか出来なかった。

医者が診察している間、

ただ祈ることしか出来なかった自分が情けない。

自分では彼女を救うことができないのだ。

「王子、彼女は、栄養失調と睡眠不足が原因でしょう。

それで熱が出たようです。命に別状はありません。」

「よかった・・・。」

それしか言葉がでなかった。

命に別状はないと聞いて安堵したのだ。

その安堵感にどれだけ自分が彼女のことを愛していたかが分かった。

もう、自分は彼女を手放すことなどできないと感じた一瞬でもあった。

「・・・ですが、熱が完全に引くには時間がかかります。栄養剤と解熱剤を打っておきましたが・・・高熱はしばらく続くかと・・・」

睡眠を十分にとっていないせいで体が弱っているのです。

意識がしっかり戻るまでには、体が動くようになるのはもっとかかるかと」

「・・・そうか。これからも頼む。

俺に、なにか出来ることは、ないか？」

何か、できることしたい。

次第に落ち着いてきた頭で俺は考える。

「そばにいてあげてください。

いつ意識が戻るかわかりませんが、いつ彼女が苦しみますかも・・・

解熱剤と鎮静剤と栄養剤、・・・それと水差しをご用意しますから

それに対処をしてくださると助かります。

私も定期的に診断しに来ますから」

そう、言って、医者は、

解熱剤、鎮静剤、栄養剤、それに水を、ベッドの近くのテーブルにおいて

去っていった。

「ああ、わかった」

俺はうなずいて、ベットに寝かせたままの彼女を見た。

冷静になって、彼女を見ながら、俺は
医者言葉を考えた。

“栄養失調と睡眠不足が原因でしょう”

その言葉に今考えると無性に引っかけた。

なにが、彼女にそうさせたのか、

俺には不思議で仕方がなかった。

規則正しい彼女の生活リズムを一体何が壊させたのだろうか。

そう悩んでいるとき、

側近が部屋に入ってきた。

「リクトさま、今日の執務はどうなさいますか？

大きな課題はクリアなさいましたので、ほかに回せる仕事が多いです」

そう側近が俺に仕事の状況を説明する。

俺が彼女から離れたくないと思つての言葉だろう。

だが、それよりも、その言葉でひらめいたのは

仕事だ！

俺も最近は大忙しだった。

学園でも、仕事。王城でも仕事。

問題がおきてその解決にいそしんでいた。

それは俺以外の者も例外ではないはずだ。

「今日はしない。それよりもだ！

俺が四六時中執務をこなしてたとき、ほかの貴族たちも忙しかったのか？」

「はい。それはもう。リュネさまの家は特に大変だったと存じますが。」

「・・・やはりか！」

側近の言葉に俺は納得がいった。

リュネは優秀な女だ。

リュネの父もいくら娘といえど、仕事をさせていたに違いない。だが・・・体調を崩すほど何故・・・。

「リクト様、リュネさまの家に連絡してみてもいかがですか。リュネ様の家族はリュネ様を心配していらっさるだろうからこちらで預かっていると一言くらい・・・。」

「そつだな、すぐに電話をする。
手配しろ」

連絡ついでに聞いてみようか・・・と俺は思い至った。

ふと、窓を見ると、もう日は落ちて暗くなりつつあった。

もう、家に帰っていないとおかしい時間帯でもあるだろう。

側近が電話を持ってきた。

彼女の家の電話番号にかけて自ら電話する。

「もしもし、

リメール家当主のルードですが」

抑揚のない声で、リユネの父が電話に出た。

「こんばんは、ルード殿、ご無沙汰しております、リクトです。」

「ああ、リクト殿下、お久しぶりでございます。

何か御用でもおありですか？」

当主の声は、家に帰ってこない娘など心配していないかのような
落ち着いた声だった。

「ええ、実は、今日、リユネさんに会いまして

その折に、リユネさんは以前から体調を崩していたそうで倒れてし
まい、

今、こちらで預かっています。

彼女の体調が戻り次第、すぐにお届けしますので

心配は無用だということを伝えたかったのです」

「あれが体調を・・・？それは知らなかった。てつきり普通に仕事をこなして結果を報告を用紙でしてくれたものですから・・・。」

本当にすみません、殿下にご迷惑をおかけして・・・」

当主の声は、まるで娘の体調の心配より、王族に迷惑をかけているほうに失態があり、そちらを心配してるとしか思えないような声色だった。娘のことなど他人のことのように知らなさそうな・・・。

「いえ、迷惑などは・・・。」

それよりも、彼女の体調は彼女が自分自身で管理してたのでしょうか？

「そうですね。」

ああ、殿下、先ほどのお言葉ですが、こちらに送っていただかなくても結構です。あれは、一人暮らしですから」

当たり前のように答えた当主の言葉に俺は啞然した。

一人暮らし！？どういうことだ！！

家から通っているんじゃないのか！？

「彼女が一人暮らしを、ですか・・・？」

「はい。あれからの要望で。」

学園近くの別荘に移って一人で暮らしております」

そう当然のごとく当主は答えた。

「つい最近までルード殿もお忙しかったようですがお仕事はどうしていたのですか??」

「もちろん、あれに大半を任せました。あれは優秀ですからね。仕事の報告を用紙にまとめて送ってきていたので」

「彼女と離れていて仕事に不便はありませんでしたか?それに、一人暮らしに反対はしなかったのですか?」

「ええ、不便などひとつもございませんでしたよ。一人暮らしも特に異論はなかったです。」

そう当主はごく自然に淡々と俺の質問に答えた。

俺は当主の答えに愕然としていた。心の中で何かが爆発しそうな気までしてくる。

なんなんだ、この親子は。

「あの、なぜ彼女は一人暮らしを要望したのですか?」

「あれが一人暮らしを要望した理由ですか、
・・・そういえば、理由は特に聞いておりませんね。
あれの気まぐれでしょうかね」

「・・・学園で生活し始めて、三年くらい経ちますが

仕事以外で彼女が連絡をとってきたことは何回ありましたか？
帰ってくるようなことや、そちらから連絡などは……」

「こちらから連絡などは一度も……、
なあ、ローズ、一度もないよな？」

あれからの連絡や帰宅など仕事でも返っては来なかったよな？」

「ええ、あれからのこの三年、一度もないですね。」

ローズというのは当主夫人だ。

その婦人の声も聞こえた。

「殿下、妻に聞きましたが一度もありません。

それがなにか……？」

「いいえ。ただお聞きしたかっただけで……」

俺はただその愛のない間柄に愕然とした。

そのときだ……

「んっ……」

彼女が意識を取り戻した……。

「ここは……」

「リュネ……」

思わず呟いて、彼女をみた。

「殿下？あれが意識を取り戻したのですか？」

「ええ、そのよう、です。」

「少しお待ちください。」

受話器の、マイク部分を手でふさいで、
リュネに語りかけた。

「おい、大丈夫か、リュネ。」

今、ルード殿にこちらであずかっていると連絡してたのだが・・・

俺のほうにリュネが起き上がり、振り向いて

「ルード・・・？え、誰・・・？」

・・・ってああ・・・、あの人か・・・。

それで・・・？」

熱に浮かされた表情で、それが何とというような無関心の声で
問い返される。

「それで・・・っていわれても。」

電話、かわらなくていいのか？」

「もう、

伝えて、あるならー別に・・・。」

彼女は無関心そうにそう答えた。

なぜそんなことしなきゃいけないのかと

不思議そう。

だが、そんな様子が俺にとって不思議すぎるだが。

「いいから、かわってやれ。」

心配かけちゃだめだろう」

無理やり、受話器を俺が差し出す。

「しんぱい・・・？」

そんなものしないとおもうけど・・・

といたたそうな顔をして受話器を彼女が受け取った。

「もしもし」

「もしもし、ああ、なんだお前か。」

「はい。」

「何故かわった？珍しいじゃないか

お前が電話をかわり、声をだすなんて」

「あなたが・・・私を心配しているのではないかと

殿下が・・・。」

「心配？そんなものしないが・・・、

ああ、いや、したな。

お前、殿下に迷惑かけるなよ。

わかったな」

「はい。」

じゃあ、殿下にかわります」

リュネは俺に受話器を渡してきた。

これで満足かといいたげな表情だ。

「わかりました。リクトです。

とにかく、彼女は熱がありますからしばらくはこちらで預かります。」

「はい、わかりました」

「それでは、また」

そうそうに会話を終わらせて、リュネに向きなおった。

なんて愛のない親子なのだろう。

お互いに必要性を感じているのかすらわからないような間柄だ。

「リュネ、お前、一人暮らしだったのか」

「そう、・・・だけど」

「なぜ一人暮らしなんて・・・」

「・・・面倒だから」

彼女がそういうと同時に彼女の体がぐらりと傾く。

「お、おい・・・」

慌てて支えると、

「お互い一緒にいても・・・」

癒しにはならない・・・そういうものでしょ、
親子って」

そう淡々と答えた。

親子とは・・・

血のつながりのあるものが言う言葉だとは俺には思えなかった。

「お前は親を・・・愛していなかったのか??」

おそろおそろ俺が聞くと

「・・・?」

愛って何・・・?」

なんなのかまったくわかってない言葉が
自分に返ってきた。

「・・・」

信じられなかった。

俺は、まがりなりにも親には愛された。

親に愛されて育ってきた。

愛というものを知って育った。

同時に人間の醜さも。

だが、彼女は、愛されていない。

愛すること自体がなんなのかわかっていなかった。

俺はなにも言葉を返すことが出来なかったのだった。

“愛”（後書き）

愛を知らないリユネと愛も人の欲も知る殿下・・・！
さて、どうなる！！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9876y/>

過去の記憶は今のトラウマ

2012年1月14日14時47分発行